みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

マフィアばかりではないゴッドファザー (巻頭エッセイ)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 関, 雄二 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008350

巻頭エッセイ

マフィアばかりではないゴッドファザー

関　雄二（国立民族学博物館教授・アンデス文明研究会顧問）

ラテンアメリカには、植民地時代以来、キリスト教、とくにカトリックの強制布教を経たこともあり、熱心な信者が多く見受けられる。私がここ10年ほど発掘調査をしているペルー北高地のパコパンパという村でも同じである。村会議、上下水道委員会、農民自警団会議など公式行事の冒頭では、神に祈りが捧げられてから会議が始まる。

カトリックの習慣でよく知られるものに、擬制的親子関係がある。堅苦しい文化人類学の用語だが、親子でない年長者と子どもが、宗教を介して親子に似たような関係になるということを指す。カトリックでは、実際の誕生以上に、洗礼を信仰の誕生として重視するため、実の親ではない精神的な親、いわゆる代父が洗礼式に立ち会い、以後、代子の成長に関わるのである。代父は、ゴッドファザーと言ったほうがなじみやすいかもしれない。スペイン語ではパドリーノ（代母はマドリーナ）と呼び、代子はアイハード（女性はアイハーダ）と呼ぶ。関係は実の親と代父にも及ぶ。彼らはコンパードレ（代母にはコンマードレ）と呼び合い、それまで以上に濃密な関係を築くのである。

代子は終生、代父母を慕い、代父母は、終生代子に気を遣う。実の親が他界したら、代父母は親代わりの面倒を見るほど責任が重い。だからこそ代父母の選択は慎重になる。親しい友人が選ばれることが多いが、たまに、私のような外国人を指名してくることもある。仏教徒である私に依頼するのは、おもに経済的な理由からであることが多い。人柄を考慮しての依頼であることも信じたいところだが。

というのも代父母は、親代わりになる可能性があるばかりでなく、代子の成長の場面場面で経済的支援をしなくてはならないからだ。何人もの子どもの代父を務める私の友人の場合も、代子が幼い頃は、とくにクリスマスが忙しかった。代子にプレゼントを渡すために、何軒もはしごをし、そのたびにコンパードレに引き留められる。全部回り終えて、自宅に戻るのは真夜中ということがしばしばであった。

昨年、パコパンパ村の中学の最終学年の女子が、パドリーノになってくれと私に頼んできた。聞けば、学内でミスコンが催されるという。ミスコンならば、村祭りで審査委員長を務めたこともあり、二つ返事で引き受けた。

ミスコン当日、会場となった中学の講堂に出かけて驚いた。なにやら村中の人々が集まっている。講堂は飾り立てられ、先生は全員正装、立派な公式行事である。ラフな格好の私は完全に浮いていた。なんだか普通のミスコンとは様子が違うので、周りにいた知り合いに尋ねてみる。どうやら候補者は各学年から一人ずつ選ばれ、優勝者の学年には、賞金の半分が渡され、残りの半分は最終学年の卒業旅行の資金になるという。どうりで私に依頼してきた学生が、卒業旅行のことを言っていたわけだ。さらに聞いてみると、各候補者は、自分が選んだパドリーノと一緒に会場を歩き、観衆からお金を集めなくてはならず、それが候補者への投票の代わりになるらしい。そのために箱のようなものも用意されている。なんだかいつものミスコンとは勝手が違う。

先生の司会で開会が宣言され、各候補者は壇上で自己紹介をする。この演説も審査対象となる。よく見ると、最終学年の候補者は、私にこの大役を依頼してきた女子生徒のうちの一人であった。最高学年であるだけに、女性らしさが漂い、これなら楽勝だろうと高をくくっていた。

さていよいよ私の出番である。音楽とともに、彼女をエスコートし、場内を一周する。箱を差し出し、知り合いに協力を頼むが、なかなかお金を入れてもらえない。募金する人も、お金を握りしめた拳ごと箱に入れるので、いくら入れたのかはわからない。候補者もパドリーノも中を見てはいけないのである。1周すると、校長先生ら審査委員が中身を集計する。もちろんパドリーノも、お金を入れて良い。すべての候補者がこの手順を終えると、審査委員長が候補者ごとに集計結果を公表する。これを3回繰り返す。

やがて駆け引きがあることに気づいた。総額で勝負だから、最初の2回のお金の集まり具合を見て、最後の一周でどっさりと寄付し、目当ての候補者に勝たせる作戦をとるのが賢いやりかたのらしい。1、2回ともトップは、1学年下の候補者で、パドリーノはなんと国立銀行支所所長だった。三周目で彼は、札入れから全額を箱に入れた。まさか銀行のお金ではあるまいが、金持ちにはちがいない。

でもこれは学校行事であろうか。私は賭け事のように思えて、あまり気分が乗らなかった。それでも、候補者の学年の学生や保護者らが、よろしくと懇願してくるので、あきらめるわけにはいかない。卒業旅行がかかっているからである。でも考えてみれば、村全体で学校行事を応援していると言えないこともない。こうなれば勝つしかない。気を取り直し、最後の1枚の札を追加で箱に入れ、審査を待った。会場のざわめきも最高潮に達した。

審査発表。第一位は我が候補者。しかも僅差の勝利であった。最後の1枚の札が効いたようだ。こうしてめでたく、最終学年はクスコへの卒業旅行を果たしたという。

こんな妙なパドリーノを経験したのは初めてであったが、じつは村の生活のすみずみまでこの制度が広がっている。新築の祝い、トラクターの寄付など、いろいろな場面でパドリーノが活躍し、式典の宴を支援する。富の平準化というと大げさだが、出すべき人が出すことで、不満が解消され、村の統合が図られることはたしかなようだ。まあ銃で撃たれるわけでもないので、ゴッドファザーもよしとするか。